慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	二〇〇一年の福沢諭吉：清仏戦争期『時事新報』論説の再検討
Sub Title	
Author	井田, 進也(Ida, Shinya)
Publisher	慶應義塾福澤研究センター
Publication year	2000
Jtitle	近代日本研究 Vol.17, (2000.) ,p.45- 68
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20000000-0045

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近代日本研究第十七巻（二〇〇〇年）

二〇〇一年の福沢諭吉

——清仏戦争期『時事新報』論説の再検討——

井田進也

ことのおこり

去年北京、天津を一週間かけて一緒に廻った勤務先の学生たちが、今年も同じ顔ぶれで上海地方へ行くから教師たちも付き合えという。さてどうしたものかと迷ったが、ままよ行ってしまえと結局付き合うことにしたのは、明治十七（一八八四）年秋、中江兆民が自由党の杉田定一や、平岡浩太郎、頭山満の面々とともに上海に渡って東洋学館を創ったと伝えられており、前からこの伝説の真偽のほどを機会があれば確かめてみたいと思っていたからである。

出発前の下調べでどうやら兆民は九月六日に長崎を発った杉田と同行してないらしいこと、しかし東洋学館は蘇州河を北に渡った虹口区昆山路でじっさいに一年くらいは存続したことがわかったから、上海図書館の郷土文

献資料室では虹口地区の歴史などを若干コピーし（上海市ほか一の档案館と称する公文書館には期待していた直接資料や地図の類はなかった、というか一方ではその官僚主義に恐れ入って退散した）、昆山路のこの辺かと見当をつけたあたりを徘徊して帰ってきたが、同じ頃上海に渡った佐々友房関係の伝記に、学校制度の視察かたがた、折柄起こった清仏戦争を見物にでかけたとあるのが気にかかった。清国がイギリスと戦った阿片戦争（一八四〇～四二）は、弘化四（一八四七）年生まれの兆民にとってはすでに歴史上の事件に属したから、いよいよフランスが極東経営に乗り出したとなれば、深甚の関心を寄せずにはいられなかったはずだ。上海に渡ったという伝説が生まれたのは、出発前の杉田たちと東洋学館のみならず、清仏戦争をめぐる議論が交わされていたからではあるまいか。

明治十六年末の徴兵令改正で仏学塾に閑古鳥が鳴くようになってからの兆民はもっぱら『理学沿革史』など文部省関係の翻訳に衣食しているから、新聞論説などによって直接その清仏戦争観を叩くことはできない。それならば当時の知識人は第二の阿片戦争になるかもしれぬこの事件を概してどのように観ていたのだろうかと、主要各紙に当たってみると、『郵便報知』の尾崎行雄、『自由新聞』の小室信介らとともに、『時事新報』からも本多孫四郎が特派員として八月二十七日横浜発の三菱汽船名古屋丸に乗り込んでおり、九月四日上海に着いた特派員からの現地報道が各紙の紙面を賑わすのは同十五日頃からである。福沢が新報紙上に「脱亜論」を掲載するのは半年後の明治十八年三月十二日であるが、福沢のアジア観を代表するとされてきたこの論説に日々の清仏戦争報道がどのように投影されているのだろうか――そう考えたのがそもそも小論を起こすに至った発端である。

明治二十二年五月二十九日の雑報「大童信太夫氏」を取り上げた前稿にならって[1]、とりあえず九月十五日から十月十五、六日まで一と月間の社説と「仏清事件」と題する特報欄について、面倒だが例の認定法によって福沢

自身の筆で書かれたものとしからざるものとを加筆の度合によって五段階に分類してみよう。（ただし今回は雑報欄にまでは手が廻らなかった）『時事新報』の紙面が日頃どのようにして組み立てられ、福沢と他の論説記者との連繋がどのようになされていたかを解明することができれば、現行全集で門弟たちの群像に紛れて見えにくくなっている福沢本来の姿が浮かび上がってくるのではなかろうか。「脱亜論」の真意をめぐる議論は汗牛充棟もただならないが、賛否いずれの立場からするにせよ、仕切りなおしにひとまず福沢自身をして福沢を語らしめようではないか——小論の意図はただその一点にあるといってよい。

一　全集第十巻所収の社説を検討する

石河幹明著『福沢諭吉伝』によれば、石河が明治十八年春に入社する以前の時事新報社では福沢のほか「森下〔岩楠〕、伊藤〔欽亮〕、津田〔興二〕、渡辺〔治〕、高橋〔義雄〕、井坂〔直幹〕等が主なる記者で」[2]、社長中上川彦次郎も「自ら筆を執て社説を草し、又社員の起稿に係る論説を一々細かに校定し」[3]ていた模様である。当然、それぞれの記者独自の論説のほか「社員の起稿に係る論説」に福沢なり中上川なりが手を加えた場合が想定されるわけであるが、『時事新報』論説がおおむねそのような手続きを経てなったものとして、福沢全集第十巻に収められたこの時期の社説七篇、漫言四篇を同紙の紙面に戻って吟味しなおしてみよう（ただし原文の片仮名書きは平仮名に改める）。

九月二十四、二十五日と二日続きの社説「支那を滅ぼして欧州平なり」では二十四日分に福沢にない「正しく」「媒（なかだち）」「到らざる」があるところから、[4]高橋義雄が起稿したものと思われる。そう思って読むと、冒頭「人

間社会の運動は敢て一個人の発意に出るには非ざれども……」と切り出して、主題がどうやら「欧州各国の人民」の海外移住問題らしいと呑み込めるまで暇がかかるが、アメリカ移住を行なって成功したイギリスと、海外に進出しないで革命を迎えるに至ったフランスが対比されたかと思うと、にわかに「右の立論に付き例証を挙げて詳に之を開陳せんとするには二、三紙片の能す可きに非ざれば……」と断って、ふたたびロシア虚無党やドイツ社会党の暴発へと話題がとんでしまうところに、少壮記者の未熟さが現れているといえよう。見出しに謳った「支那」が出てくるのはようやく後半「左れば眼を転じて……世界中何れの国か最も征略に適し、之を略して利益最も多く、……最も欧人を満足せしむ可きものと思考したらば彼の卓識者は亜細亜州の支那帝国是なりと自問自答することならん」以下であるが、「既に已に」「忽地に」の筆癖[5]、「利用厚生」「愉快満足」「野蛮不毛」等四字熟語ないし熟語的表現が頻出するから、このあたりでどうやら先生が乗り出してきたものらしい。中段「知字憂患とは支那の古人の語なれども正に……」の書き入れや、「人間社会に防御力と破壊力と相対するときは……」以下「物理」の蘊蓄をうかがわせる引証は、いかにも緒方塾に学んだ物理化学系の福沢ならではと思われる。論説の評点としてはCくらいが妥当であろう。

九月二十五日分にも「遑ま」「速か」と渡辺かと思われる筆癖が散見しないではないが[6]、全文にわたって「早く既に」「夫れ是れ」「一度び」等福沢の筆癖や[7]「一旦豁然」「粗大脆弱」等の四字熟語、「宗教慈善の痴言」「国力平均の陳腐説」等の漢語的表現に貫かれているのは、前日の論説が本題に入ったばかりで意を尽くさなかったので、補説する必要を認めたためであろう[8]。そこには「欧州文明の惨情は今正に其惨を増加し　啻に優勝劣敗のみならず　優者内に相互ひに競争して容易に勝敗も見へず　唯坐して破裂を待つのみの有様」であって、今回のフランスによる中国侵略のように「外に劣者の所在を求めて内の優者の餌食に供するは　実に今日の必至必要と

も云ふ可きもの」という文明国の否定的側面に対する福沢の現実認識が示されている。清仏戦争は前説にいわゆる「破壊力」として、「物理」法則にしたがうものと考えられているのである。評点は二十五日分のみAとなる。

九月二十七日の「支那風擯斥す可し」は一目瞭然、正真正銘の福沢文である。「視做し」が特徴的であるが、ときに福沢との区別がつけにくい高橋でも「曾て」「偶ま」までで、「見做し」が決め手となる。本篇は、「百余年」の時間を実質的にとらえるかどうかは別として、同じく西洋文明に接しながら、「文明の主義如何を問ふ」た日本と、「唯其器を利用するに止ま」った中国との対比から説き起こしているが、「事物の真理原則に関する科学書等」を輸入しなかったとか、「其船舶機械等に巧なるものあるも……曾て之が為に心を動かしたる者あるを聞かず」という批判を中国に向けるとき、福沢は緒方塾時代に緒方が黒田侯から借りてきたというワンダーベルト原著の電気説に「新奇とも何とも唯驚くばかりで、一見直に魂を奪はれた」自身の体験を語っているといってよい。[9]「周公孔子」以来の中国の「旧主義」を攻撃するのに、「虚礼虚飾」「虚誕妄説」以下、日頃は控えているはずの各種の漢語表現が矢継ぎ早に繰り出されるのは、衣の下の鎧が露呈したものというべきか。末尾の結論「到底今の支那人に向ては　其開化を望む可らず　人民開化せざれば之を敵とするも恐るゝに足らず　之を友とするも精神上に利する所なし」以下は事実上半年後の「脱亜論」を先取りしており、とかく大陸進出論、侵略主義の脈絡で語られることの多い「脱亜論」の真意は、ことによるとこの辺に述べられているのではあるまいか。福沢は『通俗国憲論』（明治十一年）の「外戦止むを得ざる事」と題する第七章に「余輩の主義とする所は、戦を主張して戦を好まず、戦を好まずして戦を忘れざるのみ」と述べていた。[10]虚心に読めば、ここに語られているのはあくまで中国との絶縁であって、「友とするも……」の対句たる「敵とするも……」も、「戦を忘れざるのみ」という絶縁後の心構えを仮定するにすぎず、そこにあえて現実的、積極的な進出・侵略の意図を読みとるの

は少しく早計かと思われる。[11]

十月二日、三日と二日続きの社説「宗旨宣布の方便」は、第一日目にキリスト教の宣教が日本の風俗習慣を無視して行なわれるため、神仏等の在来宗教と摩擦を起こしやすいことを、第二日目に仏教（とくに浄土真宗）の布教が在来宗教を排撃せず平和裡に行なわれて、キリスト教の布教にまさっていることを述べたものである。前者の「耶蘇教徒」「宗旨（教）宣布」「教（法）義」等に対して、後者では「耶蘇教者」「布教」「宗義」等と明らかに用語が異なっているから、別々の記者によって起稿されたものと思われる。調べてみると前者は「択ばず」「言做す」等からおそらく渡辺治筆の文章[12]の冒頭と末尾それぞれ三分の一ほどにかなり福沢の筆が入っており、後者も「聴いて」「尋ぬる」「同う」「用ゐ」「到り」等からおそらく高橋義雄の文章[13]にほぼ満遍なく福沢の筆が入っているから、評点は前者をC、後者をBとしよう。

十月七日の社説「墓地及埋葬取締規則」は、前半で三日前に布達された同規則の問題点を逐条的に挙げ、とくに従来寺に任されていた墓地の管理が所轄警察署に移されることになると、青山、谷中等の墓地に無縁墓が増えるのではないかとの危惧を表明したものである。後半「在昔徳川の時代に……」以下、諸藩邸内で「折助　鳶の者等」を埋葬するのに用いられた「投込」法が福沢の筆癖で記述されているが、[14]福沢以外の記者が関与していることは、前半末尾「貧寒の小民」「諸民」「浮浪の輩」と揺らいでいた主語が後半では「下等人民」一本にまとめられ、また前半の「埋葬の粗匆」が後半では「埋葬は……粗略」と、前後で相異なる表現が用いられていることから明らかである。ちなみに福沢以外の記者はおそらく、ただ一人「冀ふ」（後半中程）を用いる高橋義雄で、その前後十行ほどに高橋の「蔽はれ」や、福沢にない「取扱振」のようなやや熟さぬ感のある表現が残るから、[15]評点はCくらいが妥当であろう。

十月九日の社説「拷問の説」は、拷問には冤罪を生じさせる恐れがあるとして、直接・間接身体に加えられる拷問のほか、幕府が富裕な町人から「御用金」を取り立てた「脅迫拷問」の例を挙げているが、新報紙上では例外的にほぼ全文にわたってほどこされていたルビが、全集版では少な目になっている。福沢が日頃大胆なまでに簡略な漢字の使用を心がけていた事情を考えれば、ルビが多くなったのは、とかく奇抜な漢字を多用する傾向のある少壮記者が起稿したためではないかと予想されるが、はたして「這は」「疾く」「篤と」「用ゐ」「冀望」等は高橋義雄の、[17] また「根性悪るき」「大造に」「言做さん」等は中上川の筆癖であった。[18] 一方、中段「脅迫拷問」について述べた箇所には、福沢の「難有き」「夫れ是れ」「誑かす」等が認められるから、[19] これは高橋・中上川両人による原稿にあとから「脅迫拷問」の例を補ったものであろう。全体の三分の一を福沢文とみて、評点はCとする。

十月十一日の社説「国の名声に関しては些末の事をも捨つべからず」は、洋行する人への餞別に「近来日本日新の」鉄道、電信、学校、陸海軍の施設等を写した写真、石版絵を贈ったところたいへん喜ばれたので、日本のような「新開の国」はどんな些細なことでも西洋諸国に実情を知らしめることが「我国権上に甚た大切」だと論じたものである。全篇福沢の筆癖で統一されているので、末尾に断っているように、福沢自身じっさいに「在外国友人の来状を見」る機会があって「次第々々に思想を運らして　遂に此一編を記したるもの」なのであろう。「毛頭些細の事柄」から説き起こしながら、「脱亜論」との関連で本篇が非常に重要と思われるのは、後半、「一昨年朝鮮の事変」（明治十五年の壬午事変）における日本兵の軍律が「支那兵」よりはるかに厳正に守られ、かつ品行も正しかったのは「王者の師」と呼ぶに値すると賞賛したうえで、さらに「戦は漫に之を求む可らざるのみならず　常に慎て避るこそ用兵の本色にして外交の極意なれば　今日に至るまで我日本兵が曾て一度も外国と鋒

を交へざるは　国家無上の幸」であったとの『通俗国憲論』以来の慎重論を展開していることである。さきの「支那風擯斥す可し」もまた、全篇福沢の筆になる社説の中での対中国不干渉論というべきものであった。評点としては特上のAがふさわしいだろう。

十月十五、十六日と二日続きの社説「東洋の波蘭（ポーランド）」は、第一日目に清仏戦争をフランスをはじめとする欧州列強による中国分割の伏線と位置付け、一七七三年にポーランドがロシア、オーストリア、プロイセン三国によって分割されたのも「数国合同して其責任を軽減」した結果であるとし、第二日目には中国が将来西欧列強によって分割された場合を想定して、十五年後の一八九九年十二月にときのフランス首相が書いたものとされる「支那帝国分割案」を掲げ、日本が列強への協力の代償として与えられた「台湾の全島と福建省の一半」を付録の「支那帝国分割之図」上に明示している。文章を吟味すると、第一日目冒頭の「仏蘭西との交争」「真相を洞考すれば」「欧亜戦争の入手なり」等（傍点は筆者）、福沢にはありえない生硬な熟語のほか、全篇にわたって高橋義雄の「縦（たと）ひ」「倶に」「早く已に」「懼れ」（以上第一日）、「見做す」「専ぱら」「尠からされば」（以上第二日）等が認められるから[20]、本篇は事実上高橋が起稿したものと考えてよかろう[21]。従来この論説は「まさに日本が中国分割の尖兵たる役割をもった一六年後の義和団の変での日本の役割を予想したもの」として、福沢が大陸侵略の意図を露わにしたものと解されてきたが[22]、題名の「東洋の波蘭（ポーランド）」は西欧列強による分割の危機に曝されていた中国の運命をかってのポーランド分割になぞらえたもので、「未来記」の中でも日本は、盟主たるフランスから分割仲間の末席に加えられ、いわば論功行賞によって応分の割前を宛がわれているにすぎない。末尾の「右の未来記事は単に記者の想像のみ……今日より支那の不祥を漫論したるものなれば……」以下は、高橋の「兆（きざし）」「安（いずく）んぞ」[23]を除けばこれといった特徴のない福沢文としても読めるが（それこそがまさに、福沢と一見よく似た高橋の文章なのだ）、

「当局者たる支那の人と之に間接する日本人」に対して、群狼にも等しい西欧列強の呑噬を「避くるの術なきものは畢竟皆俎上の肉ならんのみ」と警告しているのは、さきに「支那風擯斥す可し」や「国の名声に関して……」においてみた対中国消極論の延長上にあって、同じく列強の「俎上」にありながら、せめて日本だけは「支那の不祥」を回避したいという願望の表れといってよい。[24]

後年石河幹明が「十四年前の支那分割論」に、かつて「同志相會して東洋の形勢を談」ずるごとに中国分割を「自から必然の成行と認めて疑は」なかったとして右の「未来記」と「分割之図」を再録し、

> 當時に於ては世間の人々も單に一場の茶話として輕々に看過し、深く意に留めざりしことならんなれども、何ぞ圖らん、十數年前の想像論、今は着々事實に證せられて、分割の區域の如き、大凡そ間違なきのみか、漫に千八百九十九年と假定したる其期限さへも殆んど符合して、昨今既に分割の端を開くに至りしとは、大勢進歩の速なる、只驚く可きのみ。我輩は前論を再記するに當りて轉た今昔の感に堪へざるものなり

と先見の明を誇るかに見えるのは、[25]石河自身が清仏戦争期の対中国消極論から、日清戦争以降、積極的な「支那分割論」に転じたことを意味しており、いずれにせよ、高橋、石河ら、塾を出たか出ないかの「少年[26]」輩が「同志相會して」気炎を上げる場に強いて先生を立ち会わせるのは気の毒というものであろう。それゆえ「東洋の波蘭（ポーランド）」の評点は、第一日目は福沢の筆が加えられていないという意味でE、第二日目は、とくに末尾の対中国消極論に福沢の意向が反映しているとみて、文章としてはEだが、例外的にCを進呈することにしよう。

二　それでは漫言はどうか

九月十六日の「将門様の御立腹」は三日間続いた神田明神の祭礼を折悪しく大暴風雨が襲ったのは将門の祟りだとして「盆と正月と婚礼と祭礼と火事と喧嘩」の殿に時局の「福州戦争」を配したものだが、この江戸っ子風「ベランメー」調の文章の「いへども」「廻らし」「相替らず」「子供だまし」ほか、すべて高橋の筆癖であり[27]、全集版では「奇怪」に改められている「奇怪」は、この一字だけで高橋と断定してもよいほどの極め付きである。ほかに福沢でなければならぬ筆癖や表現、四字熟語の類も見当たらないから、これは高橋が書いて福沢の「検閲」をフリーパスしたものと思われる。評点Eはやむをえないだろう。

九月十七日の「大祭大風」も「将門様の御立腹」と同様、神田祭りと暴風雨を題材としたものだが、祭りの費用が三十万円、大風による各方面の損害が五百万円で、それが「不景気挽回の大妙薬」になるというなら、いっそ全国的な規模で祭りを挙行し、猛烈な大風を吹かせたらよかろう、という内容で、「神田の兄ィ」が勇ましい啖呵を切るところも同じである。「尋ぬれば」「斉しく」「直ぐに」等から高橋とみて[28]、評点はやはりE。

十月二日の「気取らッしやるな」は、現下の清仏戦争で連戦連敗中の中国が上海碇泊中の敵国軍艦を「態々自国の軍艦を供に付けて呉淞を送出す」などは文明を気取ったもので抱腹絶倒であるとし、相手の無茶には無茶をもって報ずればよいではないかと、「将門様の御立腹」と同じ「東京神田の八公」流の戯文で雑ぜ返している。本題の清仏戦争が出てくるまでに紙面の半分近くを費やして冗長であるほか、「併し」「蹈まれ」「だまし討ち」

等すべて高橋の筆癖と認められるので[29]、福沢の筆は入っていないと考える。これも評点はE。

十月十三日の「天保山人」名義の「唐嘉言唐善行」は、唐物といえば本来中国産を意味するはずであるのに、近来では西洋の舶来品と混同されているのはともかくも、「唐虞三代」の道を奉ずる山人としては、嘉言善行のような「無形の事」にかんしては「西洋諸国産は一切打拂致し度」いとして、儒学者流の頑迷を揶揄する文章になっている。調べてみると「替はりて」「遺(のこ)りて」「冀望」と高橋の筆癖が散見する一方[30]、後半「斯く拙者が……」以下、にわかに「嘉言善行」「唐虞三代の嘉言」ほか四字熟語ないし漢語的表現や古今の万国史、和漢の歴史からの引用が増えるから、高橋が「唐物」という「有形の物」の東西混同を論じていた文章を不満とした福沢が、「無形の事」の混同について後半に加筆し、合わせて題名をも定めたものと考えられる。評点は後半だけ福沢という意味で分量的にはCだが、前年秋以来の儒教主義批判[31]を踏まえた議論に持ち込んでいる点を考慮して、一つくらいBとしておこう。

三　認定結果をどう見るか

以上、明治十七年九月十五日から十月十五、十六日に至る社説・漫言（全集第十巻所収）を福沢と各論説記者の筆癖に照らして検討してきたが、これを一覧表に整理すれば左のとおりになる（＊印は参考までに全集収録外でB評価に値する論説を掲げる）。

月日	題名	想定記者	評点
九月十六日	＊「満清政府を滅ぼすものは西洋日新の文明ならん」	高橋・福沢	B
十六日	「将門様の御立腹」（漫言）	高橋	E
十七日	「大祭大風」（漫言）	高橋	E
十九日	＊「仏清事件は欧州の政治論に関係あり」	高橋・福沢	B
二十四日	「支那を滅ぼして欧州平なり」	高橋・福沢	C
二十五日	〃	〃	A
二十七日	「支那風擯斥す可し」	福沢	A
十月一日	＊「虎豹餌食を争ふ」	渡辺・福沢	B
二日	「宗旨宣布の方便」	渡辺・福沢	C
〃	「気取らッしやるな」（漫言）	高橋	E
三日	「宗旨宣布の方便」（続）	高橋・福沢	B
四日	＊「必ずしも愛親覚（新）羅氏の祭祀を絶たず」	渡辺・福沢	B
七日	「墓地及埋葬取締規則」	高橋・福沢	C

九日	「拷問の説」	高橋・中上川・福沢	C
十一日	「国の名声に関しては些末の事をも捨つべからず」	福沢	A
十三日	天保山人「唐嘉言唐善行」（漫言）	高橋・福沢	B
十五日	「東洋の波蘭（ポーランド）」	高橋	E
十六日	〃	高橋	特C

さて、従来福沢筆として読まれ、論じられてきた論説に、なんともエライ評点（福沢・高橋共通の筆癖による）がついてしまったものである。戸惑われる向きも多かろうと思う。かつて『中江兆民全集』で新聞雑誌論説の選定にかかわった際にも、自分たちで作った認定基準を採用すれば、それまで誰もが兆民筆と信じて疑わなかった『東洋自由新聞』の論説「干渉教育」ほかを落とさねばならぬという二者択一を迫られ、刊行開始間近まで同論説擁護の心情論議をしつこく蒸し返したあげく、ついに全集への収録を断念した時点で、ようやく認定基準の確定を見た経緯が思い起こされる。

『時事新報』論説については、永年福沢に親炙して同紙の生き証人をもって自他共に任じた石河幹明が「創刊以後晩年大患に罹らるゝまで凡そ十六年間に亙りて自から筆を執られ、然らざれば厳密なる校正を加へられたものであつて……十六年間に先生の目を通さなかつた社説は殆んどないといつてもよいほどである」と語った一節[32]が、今日なお研究者のあいだでも動かすべからざる論拠とみなされている観があり、福沢が読んでいるのだから福沢だとの強弁に近い全集論説擁護論に援用されているのは、ほとんど石河神話と名付けてもよいほどである。

なるほど福沢が「目を通さなかつた社説は殆んどな」かったかもしれないが、新聞は毎日出るものである。十六年ものあいだには、旅中、病中はともかくも、締め切り間際に持ち込まれて、意に満たないものでも「厳密なる校正」を加える暇のない場合もあったろうし、晩年、気力・体力が衰えるとともに、齢不惑に手の届きそうな弟子たちの文章に、はたして当初ほど容赦なく筆を加えたであろうか。とりわけ小論で検討中の論説篇にかぎっていえば、石河のいわゆる「十六年間」中、最初三年間の空白をあっさり見過ごすわけにはいかない。

大正末期から昭和初年にかけて『福沢諭吉伝』の編纂・執筆に尽瘁していた石河が、これと平行して準備された『時事新報』論説篇（『続福沢全集』所収）の編纂に余人をもって替えがたい存在であったことは言うを俟たないが、明治十四年春、高橋義雄、渡辺治らに先んじて水戸から上京した石河が義塾本科を卒業して時事新報社に入ったのは、同十八年四月のことであり、正則科を早々と十五年四月に了え、五月には新報社入りしていた高橋らに遅れること三年であった。とすると、『時事新報』論説を選ぶのに「初号からずうっと読み返して」○×などを付しながら要所々々に紙を挟んでいったといわれる石河は、[33] 入社以前の分については、実地の見聞によらず、永年福沢文に親しんで培ったと信ずる勘と、これだけの内容は先生にしか書けない式の見当によって取捨選択を行なったことになる。[34] 浩瀚な『福沢諭吉伝』が『時事新報』の章に第三巻の百五十頁を割きながら、主要な福沢論説の紹介に終始して草創期新報社の日常にまったく触れていないのは、端的にいえばその繁忙の渦中に身を置いていなかったからであり、「専任記者として社説の起草に従事したのは渡辺治、高橋義雄、及び石河幹明（著者）であつた」と名を挙げながらも、かれらが「明治二十年前後に社を去つた後は著者が専らこれ（＝起草）に当」ったことを強調するのみで、[35] かえって社外寄稿者として新報社に在籍したことのない日原昌造の逸事に六頁を割いているのは、石河と高橋らとのあいだになんらかの角逐があったことを思わせずにおかない。『福沢諭吉

伝』の編纂と同時並行的に選ばれたらしい『時事新報』論説篇は、ある意味で『福沢諭吉伝』の姉妹篇とも目しうるものであり、石河は論説篇にも、かくあれかしと願う福沢像を刻んでいたのではあるまいか。ことの当否は別として、たとえば高橋義雄に、かれが在職した明治二十年までの取捨を任せれば、高橋版の論説篇が生まれたに相違ないから、各自の福沢観に色濃く染められた論説篇は、あたかも聖書における四福音書のごとき体裁を備えるに至ったであろう。さきの一覧表に見たとおり、『時事新報』論説の取捨選択は、本来石河ひとりで同紙の束に「紙を挟んで」いってできるという性質のものではないから、以下に、石河がまだ入社していない清仏戦争期の高橋が『時事新報』論説の執筆にどのようにかかわっていたかを垣間見て、小論の結びとしよう。

四　全集に収められた高橋義雄論説

高橋の随筆集『箒のあと』には、新報社に入社後間もない頃のことが次のように回想されている。

其処で私等は結局論説記者と為るべき筈であるが、当分は見習格で何か好問題を捉へて執筆し、福沢先生の閲覧を経て時事新報に掲載の光栄を荷ふべく、例によつて渡辺と競争の位置に立つた。……時事新報は福沢先生の論説で名高いのだから、学校駆け出しの書生の論説が堂々と其紙面に掲げらるゝ事は容易でなかつた。然るに其十月私の執筆した『米国の義声天下に振ふ』といふ一文は、福沢先生より非常なる賞賛を得て、渡辺より一足先に時事の社説欄に我が文旗を翻へす事を得たので、鬼の首でも取つたやうに嬉しかつた。[36]

高橋はここで自作の題名を明らかにしているので、この処女論説が福沢全集に収められることはなかったが、『時事新報』では「何か好問題を捉へて執筆し」さえすれば「学校駆け出しの書生の論説が堂々と其紙面に掲げらるゝ事」が（容易ではなかったにせよ）ありえた、ということは注目に値する。全集論説中のB評価以下のものには、やはり少壮記者が自発的に起稿したものが含まれている可能性があり、またじっさいにそのような例を挙げることができる。

明治十六年頃、当時東洋に勢力を増しつつあった中国に日本がとかく「萎縮勝ち」なため、西洋人に「愛想をつかさ」れそうになった形勢を警告したという論説に「秋風起つて紈扇寵を失ひ、春心動いて美人恩を蒙る」の一句を入れたところ、「先生は非常に之を激賞し、晩餐の御褒美を頂戴した」とあるが[37]、調べてみるとこれは、同年十月三十一日の社説「西洋人の日本を疎外するは内外両因あり」（全集第九巻所収）のことで、「拯はざる」「擠し」「兆」「駸々」等、福沢にない筆癖[38]、「礼遇」「控制」「顧望」「匡済」等、平生の福沢にふさわしくない固い、もしくは佶屈な表現から、全文高橋と見なさざるをえない。これといった福沢の特徴も四字熟語も見当たらないから、福沢は手を入れてないであろう。Eである。

高橋はまた、その著『日本人種改良論』に加藤弘之が駁論を加えたことに触れて、

> 処で、日本人種改良論に対しては、当時の帝国大学総長であつた加藤弘之博士が、或る雑誌で堂々と論難せられたので、私は時事新報紙上で之に対抗したが、其時福沢先生が相手が面白いから確乎やるがよい……と奨励せられた……

と述べている。[39] 高橋が書いたと断っている加藤への反論そのもの（明治十九年一月十九、二十日の社説）は、さすがに全集には入っていないが、同二十二日の漫言「加藤弘之君へ質問」が、加藤の論駁を福沢が側から揶揄したものとの注記とともに収められている。右の高橋の口調からも、福沢は論争を面白がって側から声援していたように受け取れるのだが、はたしてこの漫言も、「無なる」「承われば」「成るほど」「篤と」等、高橋の筆癖で綴られており、[40] 福沢らしい箇所もないから、これまた高橋自身の論説と考えられる。評点はE。

福沢からテーマを与えられて書いた例としては、長髪族を平定後、恩賞を辞退したい旨の一詩を皇帝に奉って退隠していた将軍彭玉麟が清仏戦争に際してふたたび起用されたとき、「偉い奴が今度出て来たよ。是が仏蘭西と戦ふのだ。是で一つ社説を書いたらどうだ」といって執筆を勧められたことがあったという。[41] 全集でも明治十七年七月七日の社説「支那政府の失敗支那人民の幸福」（第九巻所収）、同じく九月八日の「清朝の奏檜胡澹庵」（第十巻所収）が彭玉麟に触れており、いずれにも福沢の手が入ってC程度の論説になっているが（引証を略す）、九月十二日の「陳蕚子」による漫言「嘉言善行の儀に付時事新報社へ御相談」（第十巻所収）は、

先生は……長毛賦退治の時に偉功を立て、其後官を去て風月を楽しみ居られしが、今度仏清葛藤の起るに及で、大に奮発して広東の軍勢と為るやいなや云々

と、福沢に執筆を勧められたときの事情に内容が合致するうえ、「承はる」「成るほど」「然かも」「～やいなや」等の筆癖から、[42] 全文高橋筆と考えられる。福沢がテーマを提供している点を考慮して評点はDとする。

さきの一覧表にも見たとおり、高橋が始終渡辺と競争していたという割には渡辺の出番が極端に少なく、「仏

清事件」欄の記事もほとんど高橋の筆になるように見受けられるのは、渡辺が新報社内で主に「会計事務を取扱」っていたことによるものらしい。[43]

五　おわりに

以上は、清仏戦争中、上海に特派した本多孫四郎の現地報道が『時事新報』紙上に掲載されはじめた明治十七年九月十五日から一ヶ月間の社説、漫言、「仏清事件」記事について、福沢自身の筆癖が認められる度合いに応じて、ABCDEの五段階評価を試みたものである。全集所収分を含む『時事新報』論説全体について、福沢の直筆とみなしうるA級論説と、高橋、渡辺以下の原稿に徹底的に手を入れたB級論説とをもって、かりに福沢思想の骨格と考えると、CDE各級の論説中には、当然、骨格を包む肉の部分と（貧寒な比喩しかみつからないが）贅肉ないし皮下脂肪の分とが含まれることになる。今後の課題は、一旦全集の枠を取り払って福沢思想の骨格たるAB級論説を選び出し、現行全集では漠として捉えようのない福沢が、『時事新報』中のどこにいるかをひとまず見きわめることであろう。中には入社したての高橋たちが事実上福沢を代筆したためにD、E評価になっている論説があるかもしれないが、現行全集にはおそらくそれよりはるかに多く、高橋たちによるD、E評価の論説が紛れ込んでいると考えられるから、目下の急務はとりあえず疑わしいものはずすことにあることを理解されたい。福沢以下各記者の筆癖をもってする認定法では、福沢思想の肉と贅肉をより分けるのはもとより不可能であるが、二〇〇一年以後の研究者が福沢思想を豊かに肉付けしうるためにも、いまその骨格を明らかにしておくことが必要なのである。

なお、高橋は福沢が晩年弟子たちとともに定めた「修身要領」に触れて、

先生が若し健康にして、今少しく長生せられたらば、近代西洋より輸入せられた我が国体と相容れない悪思想に対して、日本人の正に遵守すべき道徳本義を、高調せられたであらうと思はれます。而して其本義は言ふまでもなく、皇室中心主義に基くことであらうが、更に儒仏両教中よりも、我が神ながらの皇道と相一致する所を取つて、日本的道徳観念の根本精神を発揚し、彼の悪化思想に対抗して正々堂々、之を降伏せしめられたらうと思はれます

と述べて、追慕してやまない恩師におのれの信奉する皇室中心主義を擬している。[44]

一方、石河幹明は、独立自尊を基調とする「修身要領」の冒頭に「凡そ日本国に生々する臣民は、男女老少を問はず、万世一系の帝室を奉戴して其恩徳を仰がざるものある可らず」（傍点引用者）との、まったく異質な一句を書き加えたのは福沢だったと述べているが、[45]福沢の生前石河に口授筆記させたとして没後発表された「皇室の財産」にも「万世一系」や「臣民」の語が見えるから、[46]ここにもまた、病後の福沢を囲む石河らの意向が投影されてはいないだろうか。明治十五年の福沢は『帝室論』において、臣民ならぬ「日本国民」と「日本人民」を、帝室の万世一系ならぬ「一系万世」を用いていたし、「常に帝室を尊崇して其主義を守り、終始一の如くにして畢生其守る所を改めざる」ものとして、世の「皇学者流」を揶揄さえしていた。[47]明治二十一年の『尊王論』でも「帝室は尊厳神聖なり」と説き起こしながら、「世間に所謂尊王論者」とは一線を画していたのである。[48]大病して気弱になった福沢は、時流のおもむくまま万世一系論者に転じたのだろうか……。

今回読んだ明治十七年秋の『時事新報』論説でも、皇室中心主義や中国大陸進出論的な傾向の強い論説は、調べてみるとかならず高橋や渡辺の筆で書かれていた。高橋自身、「近頃の時事新報の活気のあるのは先生の論説ばかりではない、高橋渡辺等のやうな若手の血気が交つて居るからである」（傍点引用者）との波多野承五郎の評を聞いて誇らしく思ったことを回想しているが[49]、『時事新報』論説にしばしば感じられる「若手の血気」こそが、長きにわたって福沢と福沢思想を覆ってきたヴェールではないかと、私はひそかに考えている。昭和初期の青年の心をとらえたのがマルクシズムだったとすれば、明治憲法体制下の青年の血をたぎらせたものは、ことによると絶対化されつつある天皇制だったのではあるまいか。「脱亜論」に先立つ「東洋の波蘭（ポーランド）」、「御親征の準備如何」（高橋義雄起稿、E評価）や、日清戦争時の「日本臣民の覚悟」（石河幹明起稿、D評価）等のゆえに、福沢は全アジア的に少なからぬ悪評・悪名を蒙ってきたとさえいえるが、それが多くの場合、生前のみならず没後百年ものあいだ血気に富んだ門弟たちを「翼蔽[50]」してきた結果だとすれば、没後百年に当たる二〇〇一年は、福沢を見えにくくしている幾重ものヴェールを取り払って、本来の福沢像を回復する新紀元たるにふさわしいのではあるまいか。二十一世紀の福沢が二十世紀に大いに称揚・讃美されたのとは別様に、一層骨太の思想家として立ち現れることを筆者は期待する。

追記　さきの「世紀をつらぬく福澤諭吉―没後百年記念―」展の会場ではうっかりして見過ごしていたのだが、再校提出後同展カタログを見ていて驚いた。同四五頁に掲げられている石河幹明と日原昌造による「修身要領」草稿のうち、石河稿では「要領」とほとんど同文で「凡そ日本国に生々する臣民は男女老少を問はず帝室を奉戴して其恩徳を仰がざるものある可らず」とした後に「万世不易」の語が使われており（写真は不鮮明だが「要領」と照合すれば読める）、日原稿には「我国民

ハ万世一系ノ皇室ヲ奉戴シテ云々」とあるから、「要領」冒頭に福沢が書き加えたといわれる問題の一句は、石河稿を主文とし、「万世不易」を日原稿の「万世一系」と入れ換えて「教育勅語」にすり寄るかたちで合成されたものであることがわかる。病後の福沢はやはり弟子たちの皇室中心主義の迫力に一籌々輸していたのである。

〔小論執筆に際しては福澤研究センターの西澤直子氏はじめ、センターぐるみの御高配にあずかった。心から御礼申し上げる。また、福沢論説にかんしては大駒誠一氏編の『学問のすゝめ』以下三著作の『総文節索引』を今回はとくに辞書のようにひかせて頂き、『時事新報』論説にかんしては渡辺俊一氏からきわめて有益な御教示を頂いた。竹田行之氏は永年にわたり筆者を慶應義塾大学に御推挙下さった。拝謝するのみである。〕

注

（1）「『時事新報』は雑報欄が面白い――「大童信太夫氏」認定考」（『福沢手帖』第一〇五号）。なお、『時事新報』論説の認定をはじめて試みた「福沢諭吉『時事新報』論説の真贋」（『図書』一九九六年六月号）、および福沢が日清戦争への挙国一致の協力を識者に呼びかけたとされる「日本臣民の覚悟」を取り上げた「福沢諭吉『時事新報』論説の再認定――丸山真男の旧福沢選集第四巻『改題』批判」（『思想』一九九八年九月号）の両拙稿をも参照されたい。

（2）『福沢諭吉伝』第三巻、二四〇頁。

（3）同右、二四三頁。

（4）福沢は「正に」「／」「至る」。

（5）高橋は「已に」「立ろに」。冒頭の「一個人」が「彼の卓識者」に、「移住」が「征略」に、また「不列顛の小天地」が「生誕の小乾坤」に代わっていることも筆者の交替を物語る。ちなみに題名の「滅ぼして」もおそらく高橋（福沢は「亡し」多く、ごく稀に「滅し」。）

(6) 福沢は「遑」「速」。ちなみに、「脱亜論」にも石河の筆癖が散見することは注（1）掲出の『思想』拙論に指摘しておいた。
(7) 高橋は「已に」「／」「一たび」。
(8) 中江兆民が『東洋自由新聞』に「再論干渉教育」を書いたのも、少壮記者による前日の「干渉教育」を不備と認めたためと思われる（『中江兆民全集』第十四巻、一八頁および改題を参照）。
(9) 『福沢諭吉全集』、第七巻、七三頁。『福翁自伝』。
(10) 同右、第四巻、六四三頁。
(11) 岡義武「国民的独立と国家理性」（筑摩書房刊『近代日本思想史講座』8、二七頁）および坂野潤治「『東洋盟主論』と『脱亜入欧論』――明治中期アジア進出論の二類型」（佐藤・ディングマン編『近代日本の対外態度』、四九頁）。今永清二「『脱亜論』と中国分割に関する一考察――福沢思想の現代的意義をめぐって」（本誌第二号、二六四頁以下）。
(12) 福沢は「撰ぶ」、高橋は「撰む」。中上川は「撰（択）ぶ」。「言做す」は福沢。
(13) 福沢はそれぞれ「聞て」「尋る」「同ふ」「用ゆ（ふ）る」「至り」。
(14) 「在昔」「兼て」「僅に」は高橋と共通だが、「覆ひ」は福沢（高橋は「蔽ふ」）。
(15) 福沢は「掩（覆）ふ」「取扱ふ」。
(16) 高橋によれば福沢は「『のぼる』といふ字の書き方に上、躋、昇、登と云ふやうな種類がある処で……手取り早く誰にでも分る『上る』の字だけを使ひ、どの場合でも『のぼる』には『上』の一字で押し通し」たという（「漢文学と福沢先生」『三田評論』第四二六号）。「恠（ママ）む」や「踰（へ）て」が出てくれば、途端に高橋とわかるのは、そのためである。
(17) 福沢は「此（是）は」「用ゆ（ふ）る」「早く」「得（徳）と」「企望」。
(18) 福沢は「悪し」「大造なる」「／」（「大造に言做さん」と続けて使われているので、この「大造に」は中上川とみる）。
(19) 中上川、高橋は「有（り）難し」「／」「／」。
(20) 福沢は「仮令（ひ）」「共（與）に」「早く既に」「恐れ」「視做す」「専（ら）」「少からず」。

(21) 第二日目に高橋、福沢共通の「饒」、中上川と共通の「成蹟」が出てくるが、いずれも高橋と考えられる文章の中でのことである。
(22) 遠山茂樹『福沢諭吉――思想と政治との関連』、一八九頁。
(23) 福沢は「萌（し）」「安（焉）ぞ」。
(24) 渡辺俊一氏は「フランスのベトナム侵略と福沢諭吉――『脱亜論』再考」（本誌第8巻）において、本論説を「西欧における侵略的傾向を前にしての日本の独立に対する危機感」から「福沢が脱亜的転換を余儀なくされた」ものとしてとらえ、「『脱亜論』と脱亜的転換を同一視することによって、彼の対外感の転換における侵略性が過度に強調される結果となってしまった」と述べておられるが、本論説を福沢筆でないとする小論も、直接侵略を意図したものではないとする方向性において、渡辺氏の脱亜的転換説には賛成である。
(25) 前記「未来記」を再録する明治三十一年一月十二日付社説「十四年前の支那分割論」は、これに付せられた紹介文の「雖も」「仮りに」「当りて」「転た」から石河幹明筆と認定される（福沢は「雖ども」「仮に」「当て」「／」）。ちなみに翌十三日の「支那分割今更驚くに足らず」も「怖るゝ」「警むる」「苟めにも」「福沢先生が……」等の特徴から石河筆と判明する（福沢は「恐るゝ」「誡（戒）る」「／」「／」）。
(26) 中上川彦次郎宛福沢書簡、明治二十一年十月二十二日。
(27) 福沢は「雖ども」「運らし」「代（変）る」「誑かす」。ちなみに「恠む」を使うのは高橋のみ。
(28) 福沢は「尋れば」「均（等）しく」「直に」。
(29) 福沢は「／」「踏（践）む」「誑かす」。
(30) 福沢は「代（変）（換）る」「遺（残）し」「企望」。
(31) 『時事新報』明治十六年十一月十九日―二十一日「儒教主義」。『福沢諭吉全集』第九巻、二六八頁以下。第一日は高橋、第二、第三は渡辺の起稿にかかわるが、両者に書かせているのは福沢か。
(32) 『福沢諭吉伝』第三巻、二五六頁。
(33) 「石河幹明氏を語る」（一）。『福沢手帖』第五九号、富田正文氏発言。
(34) 『中江兆民全集』編纂委員会が長く、かつ厳しい議論ののち最終的に認定基準採択の方向で意見の一致をみたのは、

多少とも兆民読みを自任する委員各自の勘や見当が、いかにいい加減であるかが露呈した結果である。

(35) 『福沢諭吉伝』第三巻、二六一頁以下。

(36) 高橋義雄『箒のあと』、上巻、二十二「論説の執筆」、七一～七二頁。

(37) 同右、七三頁。

(38) 福沢は「救ふ」「落す」「萌」「駸々乎」。

(39) 同右。

(40) 福沢は「なく」「承けて」「／」「得（徳）と」。

(41) 高橋前掲「漢文学と福沢先生」

(42) 福沢は「承け」「／」「然も」「～や否（な）」。

(43) 高橋義雄編『福沢先生を語る』、二五三頁「坂田実氏実話」。

(44) 高橋前掲「漢文学と福沢先生」。これは兆民の弟子の幸徳秋水が「……先生は、独り革命思想の鼓吹者たるのみならず、更に革命の策士、断行者たらんとし」たと恩師を高橋とは反対側に引きつけているのと好一対である（岩波文庫『兆民先生・兆民先生行状記』一三頁）。

(45) 『福沢諭吉伝』第四巻、三一七頁。

(46) 『福沢諭吉全集』第十六巻、六八三頁。なお、「万世一系」をめぐる論議については、山住正己「『修身要領』百周年」（『福沢手帖』第一〇六号）を参照。

(47) 『福沢諭吉全集』第五巻、二六三頁。

(48) 同右、第六巻、六頁。

(49) 高橋前掲『箒のあと』、上巻、七四頁。

(50) 『中江兆民全集』第一巻、三三頁（策論）。福沢も緒方塾で訳したという『ペル築城書』では同様な意味で「守兵を屏翳す可き」などと佶屈な表現を使っていた（『福沢諭吉全集』第七巻、二八七頁）。

（いだ　しんや　　大妻女子大学比較文化学部比較文化学科長）